産業社会と企業　③　経済発展の諸要因（１）自然

【テーマ】
①「豊かさ」とはなにか？　市場経済がもっとも「豊か」な社会なのはなぜか？
②人間と自然とのかかわりにはどのような特徴があるか。他の動物との違いは？
③どのような自然環境が経済発展（市場経済化）を促進したのか？

【１】アダム・スミス（1776）『国富論』
（１）富かさとはなにか
①「どの国でも、その国の国民が年間に行う労働こそが、生活の必需品として、生活を豊かにする利便品として、国民が年間に消費するもののすべてを生み出す源泉である。」

②「国内の労働の生産物かそれを使って外国から購入したものの量が、それらを消費する国民一人当たりでみて多いか少ないかによって、その国の国民が求める必需品と利便品が充分に供給されているかどうかが決まる。」

（２）富はどうすれば増大するか？
③「労働の生産性が飛躍的に向上してきたのは分業の結果だし、各分野の労働で使われる技能や技術もかなりの部分、分業の結果、得られたものだと思える。」

④「個人は一般に公共の利益を推進しようと意図してもいない…（略）…個人はこの場合にも、他の多くの場合と同様に、見えざる手に導かれて、自分の意図の中には全くなかった目的を推進する…（略）…自分自身の利益を追求することによって、個人はしばしば、社会の利益を、実際にそれを促進しようと意図する場合よりも効果的に推進する」

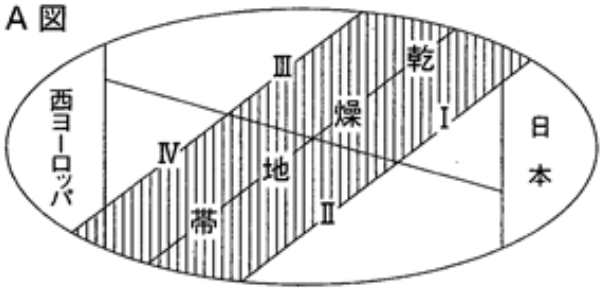
（３）分業発展の条件

【２】自然と人間
（１）自然への働きかけ

（２）サルと人間との境界

三浦つとむ『弁証法は
どういう科学か』

【３】自然と経済発展：
梅棹忠夫「文明の生態史観序説」（『中央公論』1957 年２月号）
（１）生態史観の内容
＃生態史観
⑤「歴史というものは、生態学的な見かたをすれば、人間と土地との相互作用の進行のあとである。……その進行の型を決定する諸要因のうちで、第一に重要なのは自然的要因である。そして、その自然的要因の分布は、でたらめではない。それが幾何学的な分布をしめしているのである。」



＃第一地域
⑥「わたしは、明治維新以来の日本の近代文明と、西欧近代文明との関係を、一種の平行進化とみている。……第一地域の、現代における経済上の体制は、いうまでもなく高度資本主義である。その国ぐにでは、ブルジョワが実質的な支配権をにぎっている。そしてその体制は、みんな革命によって獲得された。……革命以前はどういう体制か。いうまでもなく、封建体制である。封建体制がブルジョワを養成した。」
⑦「そこは、めぐまれた地域だった。中緯度温帯。適度の雨量。たかい土地の生産力。原則として森林におおわれていたから、技術水準のひくい場合は、乾燥地帯のように、文明の発源地にはなりにくいが、ある程度の技術の段階に達した場合は、熱帯降雨林のような手ごわいものではない。なによりも、ここははしっこだった。中央アジア的暴力が、ここまでおよぶことはまずなかった。しかも、いよいよそれがやってきたときに、それに対抗

できるほど、実力の蓄積ができていた……つまり、第一地域というところは、まんまと第二地域からの攻撃と破壊をまぬかれた温室みないなところだ。」

＃第二地域
⑧「資本主義体制は未成熟である。……そこでは、革命によってもたらされるものは、おおむね独裁者体制である。そして、革命以前の体制は、封建制ではなくて、主として専制君主制か、植民地体制である。専制君主や植民地体制の支配のもとでは、ブルジョワは発育不良である。」
⑨「きわめていちじるしい現象は、全大陸を東北から西南にななめに横断する巨大な乾燥地帯の存在である。それは、砂漠とオアシスの地帯か、あるいはステップである。それに接して、森林ステップあるいはサバンナがあらわれる。古代文明は、だいたいもうしあわせたように、この乾燥地帯のまっただなか、あるいはその縁辺にそうサバンナを本拠として成立している。乾燥地帯は悪魔の巣だ。……第二地域の歴史は、だいたいにおいて、破壊と征服の歴史である。王朝は、暴力を有効に排除しえたときだけ、うまくさかえる。その場合も、いつおそいかかってくるかもしれないあたらしい暴力に対して、いつも身がまえていなければならない。それは、おびただしい生産力の浪費ではなかったか。」

（２）生態史観の検討課題
⑩ビリングッチョ（1480 - 1539？）（以下、関連文献⑨より）
「技術は自然にくらべてきわめて非力で、自然を模倣しようとして自然に従うのであるが、事物にたいして外部から表面的に作用するにすぎない」
⑪アグリッパ（1486-1535）
「驚くべき奇蹟が、技術によってではなく、自然によってしばしば起こるのである。技術は、自然にたいして下僕のように仕えることで、これらの事物に働きかける」

⑫ミシェル・シュヴァリエ（1836）
「それ自身では弱く貧弱な存在にすぎない人間は、機械の助けを借りて、この無限の地球上に手を広げ、大河の本流を、荒れ狂う風を、海の満ち干きをわがものとする。……地球のわきにおいたらひとつの原子にすぎない人類が、その地球を、倦むことなく従順に働く召使にしてしまう。」
⑬ユゴー『九十三年』（1874）
「自然を利用するのです。自然は人間の絶大な助手でありながら軽んじられています。風力や、落水の力や、磁力などあますところなく人間のために活動させるのです。」

※関連文献
①堂目卓生（2008）『アダム・スミス』中公新書
・経済学の父、アダム・スミスに関する平易かつ本格的な入門書。『国富論』とならぶ主著『道徳感情論』に注目することで、彼の全体像を浮き彫りにした。

②三井誠［2005］『人類進化の 700 万年』講談社現代新書
③山田慶兒［2010］『技術からみた人類の歴史』編集グループ SURE
・人類とサルとの違いを明快にするには、人類の誕生・発展過程に注目するのが有益である。②は人類誕生に関する近年の議論を分かりやすく説明。③は技術史の観点から人類史を議論したもの。

④梅棹忠夫『文明の生態史観』中公文庫
・「文明の生態史観序説」を収録した論集
⑤梅棹忠夫（2002）『行為と妄想』中公文庫
⑥山本紀夫（2012）『梅棹忠夫』中公新書
・⑤は自伝、⑥は弟子による伝記で業績が要領よくまとめられている。「生態史観」に代表される卓抜な発想はどのようにして誕生したのか？「こんなおもしろいことはない」（⑥のオビ文）という言葉が彼の人生を一言で表している。

⑦川勝平太（1991）『日本文明と近代西洋―『鎖国』再考』NHK ブックス
・日本や東アジアの経済発展の背景を「生態史観」を大胆に摂取しつつ論じたもの。鎖国下の江戸社会を西欧近代文明に匹敵する文明として高く評価。著者が現在の静岡県知事だけあって、読んでいて面白い。

⑧名越健郎（2012）『独裁者プーチン』文春新書
・「第二地域」における政治と経済との今後を考えるヒントとして。

⑨山本義隆（2011）『福島の原発事故をめぐって』みすず書房
・19 世紀以来の科学技術幻想の破綻という観点から原発を考察。「自然の人間化」における成長とは別の側面を論じたといえる。100 頁ほどの小著だが中身は濃密である。著者は駿台予備校の有名講師。